14.5-189
1200501215198

14.5
189

調査資料第七輯

横濱港重要貿易品解說（其三）

（薄荷腦、附薄荷油、薄荷玉）

横濱商業會議所調査部

始

横濱港重要貿易品解說（其三）

目次

第四、薄荷腦、附薄荷油、薄荷玉

一、概說……一

二、我邦生產狀況……二

(1)薄荷の栽培から精製迄　(2)薄荷生產高　(3)生產地

三、輸出狀況……三

(1)薄荷腦輸出高　(2)薄荷腦仕向國　(3)薄荷油及薄荷玉の輸出

四、建值及包裝……一三

五、同業組合及其他の機關……一三

六、薄荷製品の輸出貿易と横濱……一五

七、海外需給狀況……一六

(1)北米合衆國　(2)歐州

昭和二年
帝國圖書館藏

〃 祁 寄贈本

薄荷腦、附 薄荷油及薄荷玉

一、概　説

我國に於ける薄荷は學名 Mentha Arvensis L. Var. piperascens Holmes 又は Mentha Canadensis L. Var Piperacens Briquet と稱する多年性の植物で古くから栽培せられたるものであるが、僅かに漢方の葯材として用いられた丈のと故其栽培高は極めて少く、栽培地としては久しく大和の國を主産地として居つた處、文化年間備中の後月郡地方に試植せられ、次第に附近に傳播し現在に於ては所謂三備地方の特産品となつた。

一方山形縣にも一時盛に栽培せられたが、之れは近年次第に減じて最近に於ては殆ど全滅の形となつたけれども、山形縣より北海道に移植せられた分は逐年作付反別を增し、今や北海道（主産地北見の國）の薄荷産高は全國に冠たる有樣となつた。

現在に於ける薄荷製品は藥材としての外菓子、化粧用香料、齒磨粉、清凉飲料等に廣く用ひられ世界に於ける産地としては我邦の外、米、英、佛、獨、支等の諸國にあるが、英米の分は其製品の品質優良でありの殊に英國産の如きは、優雅なる香氣を有する點では世界無比であるが、其耕作に或は特種の灌漑方法を

用ひ、或は高價なる蒸溜機の設備を有する特種製造業者の手を經るので、原價極めて高く且つ生産高も自國の製造工業原料として不足を告げる程度の數量であり、支那に於ける産品は主として南部地方殊に江蘇江西の省境に産するのであるが、栽培及採取の方法が幼稚であつて、所謂犬薄荷を混じて居る爲香氣頗る惡しく尙其額も多くはない。

之に反し日本品は其取卸油（原油）年額六十萬乃至一百十萬斤（大正十三乃至十四年度農林省統計）を産し、之に對する內地消費量は五％見當に過きずして、他は精製の上全部海外輸出に振向けらる現狀であり尙歐米品は Mentha Piperita Hudson Var. Vulgaris Sole なる學名の植物から採られるので、油分の多きに反して、日本品は多量の腦分を含有する特色を持つて居るが故に、其製品たる薄荷腦は商品として世界獨步の地位を保つて居り薄荷腦、薄荷油、薄荷玉等薄荷製品の全部を合計するときは、一ケ年の輸出高約一千五百萬圓（昭和元年度）に達し我國重要輸出品の一たるを失はぬ次第である。

只本品は其取引上盛な思惑賣買の對象物となつて居り、屢々實際の需給關係を離れた相場を現出することがあつて、栽培業者にあつても取扱業者に於ても其賣買に投機的な氣分を免れぬ現狀である。

二、我邦の生産狀況

(1) 薄荷の栽培から製造迄

薄荷は普通根分法に依つて繁殖させるのが便利である。

秋期又早春に於て植付け北海道では九月中旬、三備地方では五月下旬乃至六月上旬一回、八月上中旬一回、十月下旬一回の三回に涉つて刈取られる、刈取られたものは之を連ねて蔭乾にした上取卸油製造の機械に掛ける。機械は釜の蒸氣で蒸發せる油分を冷却槽中に導き液體とする裝置で、其得たるものを水分と分離し濾過したものが所謂取卸油原油であつて、之は多くは生産地に於て直ちに精製せられず大抵其儘石油の空罐に詰めて横濱、神戸にある精製工場に賣られる。精製工場では之を更に蒸溜精製して腦分と油分とに分つ、薄荷腦、薄荷油と稱して輸出せらるるものは之である。薄荷玉は腦を指頭大に固め大抵椎の實形の容器中に固定せる串に挿し顏面、鼻口、などを擦るのに便ならしめたものである。

(2) 薄荷生産高

過去十四年間に於ける我邦薄荷葉子の收獲高、取卸油及薄荷腦、薄荷油の生産高は左表の通りである。

（農省務省、農林省、商工省統計による）

年次	作付反別	葉子收獲高	同上價額	取卸薄荷 數量	取卸薄荷 價贈
	町	貫	円	斤	円
大正元年	六、三五五	六、三四四、〇三〇	—	四六四、三四	三、一一九、〇八三
二年	一一、三七三	一一、〇七六、〇〇六	—	六〇七、〇八八	二、〇四五、九四九
三年	一二、四九七	二一、六五六、四〇三	—	六一七、八五四	一、三九九、〇六八
四年	一二、二二七	一五、三八三、九三九	一、七八二、七二九	六四二、七三一	一、九八四、四七〇

年次	薄荷油 数量	薄荷油 価額	薄荷脳 数量	薄荷脳 価額
	斤	円	斤	円
五年	一二、〇一三	一七、一三七、二八二	二、二二〇、〇〇七	七九五、八一八
六年	九、一〇六	八、六五六、三五六	一、二八〇、一九三	二、四八二、二六三
七年	三、七九六	三、三七九、七七九	八四四、八七八	一、三三四、七二一
八年	二、二九六	二、二〇六、四五二	一、二六五、八八〇	二、五〇八、七一二
九年	四、六九四	三、五〇二、八三三	八三五、七五一	三、三五〇、二一九
十年	四、九五〇	四、二一六、四三五	九四八、一八〇	一、六六六、八七〇
十一年	五、九三一	四、二二九、一七二	二、二八八、七八六	二、七七八、七七一
十二年	七、一七六	四、九〇九、二八六	二、六二九、四二九	三、九四三、一二九
十三年	八、五二九	六、二八九、六〇一	六、二七二、四七三	八、四一〇、四三四
十四年	一一、六一九	一〇、三〇一、四一二	九、六八五、七六三	一二、八〇八、六七四
大正元年	一五六、〇九六	五九五、四五六	一、五二一、六二〇	一、九七七、〇一五
二年	二〇五、六三三	六六二、五八七	七三九、九八九	三、一〇二、五二三
三年	二四四、九九九	五九九、九六四		
四年	四三一、八六一	七八二、三七五		
五年	四〇五、八一一	七〇七、五五二		
六年	四二七、一〇六	七一六、〇〇一		
七年	三一五、四〇〇	七三九、九八九		
八年	三三六、一九三	一、五二一、六二〇		
九年	三四三、八七一	一、一五五、〇〇三		
十年	三〇〇、九一七	六五九、五二三		
十一年	二八、七〇八	八六、八六一		
十二年	八一八、四二五	二、一四七、二五八	二三〇、八九八	三、三八七、九八五
十三年	二二二、三〇四	一、九七七、〇一五	三一八、八九五	七、四四〇、二二二
十四年	三三二、七四六	三、一〇二、五二三	二八九、九二三	六、四八四、五四七

(3) 生産地

北海道北見地方に於ける薄荷の耕作は逐年増加の趨勢にあつて、大正十四年の如きは其作付反別九千二百餘町歩、收獲高五百萬圓に垂んとし之に次て三備地方に於ても、最近數年間の作付反別增加率は目覺しきものあり、同年に於て二千三百町歩收獲高四百七十萬圓に及んでゐる。但薄荷は氣候、植付品種、傳染病蔓延の有無等に依つて毎年の收獲、數額に差異があり其上其製品の相場は極めて變動の甚しいもの故、農家の實際收入は時に甚しく豫想を裏切られ、生産者に於ては其收入上に屢々悲喜劇が起る次第で有り、前年度の賣相場の高低は次年度の作付反別に大なる影響がある。

其一反當の收入に就て考ふるに三備地方のものは其品質に於て北海道ものに比し良好であり又年三回の收獲があるので北海道の夫れとは其間多大の逕庭がある。

大正十四年度に於て見るも農林省の統計は岡山縣百四十九圓、廣島縣百七十四圓なるに對し北海道は七十二圓を示して居る各産地の近年に於ける收獲狀態は左表の通りである。

（農商務省、農林省統計による）

薄荷主産地收獲高表

（＊印ハ單位以下ヲ示ス）

地方名	年次	作付反別	收獲高	價格	一反平均收獲高
北海道	大正十一年	五、四七一町	三、七一五、六八二貫	一、九八三、五八三円	六八円
	大正十二年	六、五八六	四、二一一、八三五	二、〇二七、二五一	六四
	大正十三年	七、四六七	五、〇三二、七六四	四、四四二、六七〇	六七
	大正十四年	九、二二一	六、六七六、二八二	四、八六八、三七八	七二
三備地方 岡山縣	大正十一年	四四二	四八五、六七〇	二八九、八九二	一一〇
	大正十二年	五一八	六二二、二一二	五四九、八二八	一二〇
	大正十三年	九四五	一、一二八、〇〇二	一、六八三、〇三七	一一九
	大正十四年	一、九二七	二、八六五、九五二	三、八五七、一四九	一四九
三備地方 廣島縣	大正十一年	一二	二〇、二九五	一〇、六九三	一七三
	大正十二年	三二	五〇、四八九	三九、一一五	一五六
	大正十三年	六六	一〇四、九一五	一三〇、七二四	一五九
	大正十四年	三八〇	六六二、八一一	八七五、四八六	一七四
山形縣	大正十一年	四	二、四二〇	一、六九四	六五
	大正十二年	三	四、一七〇	二、九一九	一二六
	大正十三年	*	八〇	六〇	四〇
	大正十四年	*	一〇〇	八〇	五〇

其他近來兵庫縣、香川縣、群馬縣等に栽培を試むるものあるも其數尚多くない。

尚農商務省、商工省の統計により取卸原油及其製品たる薄荷腦、薄荷油の主要生産地別生産高表を示せば次の通りである。

主要生産地統計表（自大正十一年至同十四年間）

地方名	年次	薄荷取卸原油 數量	薄荷取卸原油 價額	薄荷油 數量	薄荷油 價額	薄荷腦 數量	薄荷腦 價額
北海道	大正十一年	二六六、四八八斤	二、三七三、一三五円	一、五〇〇斤	四、五〇〇円	一、二〇〇斤	二〇、四〇〇円
	十二年	二八七、六四六	二、七二八、五〇一	四八八	一、七四八	四三八	七、八八四
	十三年	四三三、五五六	五、三八九、二七八	二、八七五	二、八七五〇	一、八七五	五六、二五〇
	十四年	七二三、五一七	六、八三五、二三一	二六九	二、一一四	四五二	四、四九六
山形縣	大正十一年	四五	二九三	五、六〇〇	七、二八〇	四、八〇〇	三八、四〇〇
	十二年	二四	一一七	四、二〇〇	一六、八〇〇	三、六〇〇	七二、〇〇〇
	十三年	一五	六〇	四、五〇〇	三六、〇〇〇	三、八〇〇	一一四、〇〇〇
	十四年	一五	四五	四、七〇〇	四七、〇〇〇	三、八五〇	一一五、五〇〇
岡山縣	大正十一年	四三、二九四	三七二、六四二	—	—	—	—
	十二年	八四、九三二	一、〇二〇 〇八二	—	—	—	—
	十三年	一四五、一一八	二、六三四、二〇二	—	—	—	—
	十四年	三四六、八七四	五、二二二、四一一	—	—	—	—
廣島縣	大正十一年	一、一二六	九、八〇八	—	—	—	—
	十二年	三、四八四	四三、四五六	一三	六五	一三	二一一
	十三年	一二、二九二	一九〇、三一九	四〇	二二〇	四〇	七二〇
	十四年	三九、五九八	五一七、一七〇	一、〇三〇	一二、九八四	五五〇	八、一七六
兵庫縣	大正十一年	四、〇八〇	二二、四四〇	一、〇六一	七五、〇三一	二六、三六八	四〇七、九三六
	十二年	九、九五〇	一四九、二五〇	一六三、七一五	六九八、五八〇	一五一、八三八	二、八九五、七五〇
	十三年	一一、八五〇	一七七、七五〇	二〇〇、五二一	一、七五四、〇八一	二九八、八八三	六、七九七、六七四
	十四年	一二、七五〇	一九一、二五〇	二八六、五〇九	二、六六八、〇九〇	二五一、九三一	五、五三七、九三七

沖縄縣	大正十二年	一六〇	一、二八〇	—	—
	十三年	一、五〇〇	一八、二四〇	—	—
	十四年	二、九〇〇	三四、八〇〇	—	—
神奈川縣	大正十二年	—	—	六五〇、〇〇〇	一、四三〇、〇〇〇
	十三年	—	—	一四、三四八	一五七、八二八
	十四年	—	—	四〇、一八九	三七一、八二〇

三、輸出狀況

(1) 薄荷腦輸出高

前述の如く歐米諸國產の薄荷は腦分極めて少きに反し、我邦產は腦分の多きを特色とするが故に、薄荷腦の產出に於ては全く何れの國も追隨を許さぬ情態にあるので、之が輸出は大體に於て遂年增加を示して居る。卽ち次に示す如く大正六七年頃は約二千五百擔其價額約一百五十萬圓見當であつたものが、大正九年には其數量約三千七百擔價額約五百五十万圓と數量に於て約一倍半價額に於て約三培四分の躍進を示した、數後其量に於ては六七年度當時の程度に減少したが相場の騰貴により價額は十一年度に於て約二培、十三年度に於て約五倍を示し、十四年度に於ては引續いての好況により數量も六年度に比へて約一倍七分見當に增加すると共に價額に於ては實に七倍八分の激增を示した。十五年度に於ては相場が漸落步調を辿つた爲めに數量に於ては、尙二倍强に達したけれとも價額の增加率は反つて六倍三分見當

迄落ちたのである。

全國薄荷腦輸出高表

	數量	大正六年を一とせる數量割合	價額	大正六年を一とせる價額割合
大正六年	二、五一二瓩	一、〇〇	一、五九四、三二七円	一、〇〇
大正七年	二、三七三	〇、九四	一、五四四、三〇七	〇、九七
大正八年	二、三九九	〇、九五	二、五四六、八九八	一、六〇
大正九年	三、七〇四	一、四七	五、四八九、八一五	三、四四
大正十年	二、二九九	〇、九一	二、一七二、四八〇	一、三六
大正十一年	二、四六八	〇、九八	三、三二二、九〇六	二、〇八
大正十二年	△一、七一七	〇、六八	三、四五四、二七四	二、一七
大正十三年	二、六九九	一、〇七	七、八一二、七四一	四、九〇
大正十四年	四、二〇八	一、六七	一二、四七八、二一二	七、八三
大正十五年	五、二八七	二、一〇	一〇、〇四九、四七五	六、三四

(2) 薄荷腦仕向國

今過去四年間の統計に就て薄荷腦の仕向國別高を見るに米國は一頭地を拔き數量價額共五割乃至六割を占めて居る次は英國て之は八分乃至一割二分見當を占め他は獨逸、佛國及英領印度等て何れも一割見當を示して居る詳細は次表の通りである。

仕向國別薄荷腦輸出高表

仕向國	大正十二年 數量	全輸出量に對する歩合	價額	全輸出價額に對する歩合	大正十三年 數量	全輸出數量に對する歩合	價額	全輸出價額に對する歩合
英領印度	八二擔	〇、〇四八	一四六、四〇九円	〇、〇四四	二〇七擔	〇、〇七七	六四四、〇六四円	〇、〇八三
英國	一五一	〇、〇八八		〇、〇九一	三五六	〇、一三二	九四六、六三六	〇、一二一
佛國	七二	〇、〇四二	一三六、四七〇	〇、〇四〇	二〇四	〇、〇七六	五九〇、五〇七	〇、〇七六
獨逸	七六	〇、〇四六	一五八、六九一	〇、〇四六	四九一	〇、一八二	一、三七七、一八五	〇、一七六
合衆國	一、一四五	〇、六六七	二、三二四、八一五	〇、六七三	一、三一一	〇、四八六	三、八六三、〇六三	〇、四九四
其他	一八八	〇、一〇九	三七一、四七四	〇、一〇八	一三〇	〇、〇四八	三九一、二八六	〇、〇五〇
計	一、七一七		三、四五四、二七四		二、六九九		七、八一二、七四一	

仕向國	大正十四年 數量	全輸出量に對する歩合	價額	全輸出價額に對する歩合	大正十五年 數量	全輸出價額に對する歩合	價額	全輸出價額に對する歩合
英領印度	三七五擔	〇、〇八九	一、一五八、三三二円	〇、〇九三	三九七擔	〇、〇七五	六七〇、〇六四円	〇、〇六七
英國	五三四	〇、一二七	一、五〇三、二七九	〇、一二〇	四一一	〇、〇七八	八〇六、六五四	〇、〇八〇
佛國	四二一	〇、一〇〇	一、一九一、二八〇	〇、〇九五	六〇一	〇、一一四	一、二九九、九二九	〇、一二九
獨逸	二二一	〇、〇五二	六七六、四一九	〇、〇五四	二八四	〇、〇五四	四三一、六三八	〇、〇四三
合衆國	二、三一七	〇、五五〇	六、六九七、二〇〇	〇、五五八	三、二二六	〇、六一〇	六、一三四、二三七	〇、六一〇
其他	三四〇	〇、〇八一	九八一、七〇二	〇、〇七九	三八六	〇、〇七三	七〇六、九五三	〇、〇七〇
計	四、二〇八		一二、四七八、二一二		五、二八七		一〇、〇四九、四七五	

(3) 薄荷油及薄荷玉の輸出

過去五年間に於ける薄荷油の輸出統計は矢張大體腦に追隨して增加を示して居る。

即ち大正十一年度に約二千四百擔七十六万圓なりしもの十四年度には約五千三百擔五百三十万圓と數量に於て二倍二分價額に於て七倍の大躍進を示し、翌十五年度に於ては相場の下落により數量に於ては尙二倍を示すも價額に於ては五倍八分見當迄低落した。

薄荷玉の輸出は毎年十七万乃至二十万打見當を上下し大なる飛躍を見す價額も十四年度に於て相場昂騰により八割方の增加を見たに過きぬ。

詳細は次表の示す如くである。

全國薄荷油、薄荷玉輸出高表

年次	薄荷油 數量	大正十一年を一とした數量割合	薄荷油 價額	大正十一年を一とした價額割合	薄荷玉 數量	薄荷玉 價額
大正十一年	二、三九三擔	一、〇〇	七五八、八六七円	一、〇〇	一七七、二九九打	二〇六、五六一円
大正十二年	二、三八一	〇、九九	九七七、二四五	一、二九	△一五〇、九〇二	一七五、六〇二
大正十三年	二、九六五	一、二四	二、四二〇、五八九	三、一九	一八四、三二三	二、九、四五一
大正十四年	五、二八四	二、二一	五、三〇九、〇〇五	七、〇〇	二〇三、七二三	二九九、三〇〇
大正十五年	四、七九一	二、〇〇	四、四二五、八七一	五、八三	一七六、六六八	二一七、八〇八

茲に薄荷油の全國仕向地別統計を得ぬのは遺憾であるが、左に示す神戸港丈けの統計によるも、其一班を窺ふことは出來る。即ち油は米國自身可成の產出があるので、我國の油は寧ろ歐州向が多いことを示

してゐる就中英國の需要高は最も多く獨逸佛蘭西が之に次いで居る。

神戸輸出薄荷油仕向國別表

仕向地名	大正十二年		大正十三年	
	瓩	円	瓩	円
香港			八四七	六七九、七三二
英吉利	五六九	二三六、九一三	一〇	七、〇〇一
北米合衆國	五	一、七〇五	四四九	三五八、五一八
佛蘭西	二七一	一、二二、〇四五	一五	一一、〇四五
濠太剌利	三〇	一三、〇九六	二一四	二七二、四六七
其他諸國	一四五	四八、二九四	一、二九九	九六七、九三〇
海峽殖民地	九四五	三九一、二七二	四八	四六、四六一
獨逸	一八	七、五四五	二、八八二	二、三四三、一五四
英領印度	一、九八三	八一〇、八七〇		
計				

仕向地名	大正十四年		大正十五年	
	瓩	円	瓩	円
香港			四五	三四、二一六
英吉利	一、九四四	一、八三三、三〇九	一、二九八	一、二五三、二六三
北米合衆國	六〇	六八、六二九	七九	八〇、二一三
佛蘭西	一、三七六	一、四四二、六五八	一、四二七	一、三六七、二一四
濠太剌利	四四	三八、三九四	六〇	五四、一〇二
其他諸國	二〇六	一九三、五五五	三一六	二八四、二一六
海峽殖民地	五二	五〇、二七三	二二	一七、〇四四
獨逸	一、〇一八	一、〇七九、五二二	八五六	七九七、四三五
英領印度	八四	八六、二六八	五六	七六、一六六
計	四、七八四	四、七九二、六〇八	四、一五九	三、九六三、八六九

四、建値及包裝

薄荷取卸油の賣買は北海道に於ては一組（二斤、三百六十匁）を以て相場を建て、三備地方のものは斤を以て其建値として居る。之等原油は大抵石油の空鑵に詰めて横濱及神戸の精製家へ賣られる。

薄荷腦及薄荷油の對外取引は大抵斤建を以て行はれ、包裝の際は腦油共大抵五封度の鑵入として之を一打宛取纒め木箱に收める、木箱の大さは仕向地或は買手の注文によりて一定しないか、大抵六才乃至八才見當のもので一箱に百二十打乃至二百打を詰める。

薄荷玉の包裝は普通十**グロス**見當宛を一箱とするが、本品は概して其取引數量少量なる爲め、箱の大さは注文の數量に應して適宜に造られることになる、建値は打である。

五、同業組合其他の機關

三備地方に於ては重要物産同業組合法に據つて栽培者、製造業者（取卸油）仲立業者、問屋等を包含する左の組合が設けられ、組合員協同一致して營業上の弊害を矯正し、信用を保持する目的を以て製品の

檢査を行つて居る。

組合名	所在地	設立年月日
小田後月薄荷同業組合	岡山縣小田郡小田町	明治卅八年八月
備前薄荷同業組合	同　邑久郡邑久村	明治四十年一月
中備薄荷同業組合	同　都窪郡倉敷町	大正二年六月
廣島縣薄荷同業組合	廣島縣福山市	
三備薄荷同業組合聯合會	岡山縣都窪郡倉敷町	大正九年五月

北海道には組合はなく從つて今迄製品の檢査を行つたこともなかつたが、北見薄荷研究會なるものがあつて、取卸油の堅實なる販賣方法を講ずる爲めの研究をなし、重要輸出品工業組合法に據る組合を設立しやうとし、先つ薄荷に對し重要輸出品たる指定を得る爲めに請願をして居り、一方道廳當局も斯業の順調なる發展を期する爲め檢査規定を制定し、本年度の生産品から道物産檢査所に於て製品の檢査を行ふことになつたと云ふ。

由來薄荷精製及輸出業者は其數が比較的少いので横濱にも神戸にも別に斯業に關する組合等の設けはない。

六、薄荷製品の輸出貿易と横濱

我國薄荷の輸出は其大部分横、神二港の占むる所である、横濱は我國薄荷貿易の先驅をなした所であるが、其後精製工場を神戸に設け三備及北海道より原油を買入れて精製輸出するものが增加した、過去十ケ年に於て兩港の薄荷腦輸出額を見るに、大正六年度に於ては横濱は尙全輸出高の五割見當を占めたけれとも其後遂年下り坂となり十一年に至り漸く再び五割見當に復活したるも、翌十二年には關東震災に偶つて市内工場全部を烏有に歸せしめ、爾後市内に薄荷精製工場を建設するもの僅かに一家を數ふるのみで、他は其本據及工場を神戸に遷し災後五年を經たる今日も尙昔日の勢がない。

横濱には現在も從來の小林、多勢、鈴木等の諸店及南里貿易石川禎三商店等の取扱店があつて取引を行つては居るが、其大部分は當地に工場を有せす、從つて横濱港より積荷する量は極めて少い狀態に立至つた。今左に薄荷腦の横神二港の輸出高を對比して見やう。

横神二港薄荷腦輸出高比較表

年次	横濱 數量	横濱 全輸出量に對する割合	横濱 價額	横濱 全輸出價額に對する割合	神戸 數量	神戸 全輸出量に對する割合	神戸 價額	神戸 全輸出價額に對する割合
大正六年	一、二二五瓩	〇、四八八	八五一、〇八八円	〇、五三四	一、二五〇瓩	〇、四九八	七二三円	〇、四五四
七年	八四四	〇、三五六	五五一、一四九	〇、三五七	一、四〇一	〇、五九〇	八〇三	〇、五二〇

八年	六一九	〇、二五八	九三九、一五七	〇、三六九	一、六三〇	〇、六八〇	一、四二三	〇、五五九
九年	四三〇	〇、一一六	七一四、五二七	〇、一三〇	三、二三七	〇、八七五	四、七〇八	〇、八五八
十年	七七五	〇、三三七	七二〇、二六〇	〇、三三二	一、四六〇	〇、六三五	一、三九〇	〇、六四〇
十一年	一、二二一	〇、四九四	一、七一九、三九三	〇、五一七	一、二二二	〇、四九四	一、五七一	〇、四七三
十二年	二一六	〇、一二五	四七九、二八〇	〇、一三九	一、四八六	〇、八六四	二、九五三	〇、八五五
十三年	四五	〇、〇一七	一五四、三〇〇	〇、〇二〇	二、六〇五	〇、九六五	七、五三三	〇、九六四
十四年	三〇〇	〇、〇七一	八三七、六一四	〇、〇六七	三、七六七	〇、八九五	一一、三四五	〇、九〇九
十五年	四三八	〇、〇八三	六五六、四一三	〇、〇六五	四、五四六	〇、八五九	八、八八二	〇、八八四

七、海外需給狀況

(1) 北米合衆國

米國の薄荷は主として**ミシガン、インデアナ**州及**オレゴン**州に產し、其精製工場は前二州に集中せられ、其產額（精製薄荷油）は年額三十萬乃至三十五萬封度と見積られる米國產薄荷は日本種と異り、油分頗る多く腦分の含有量殆んどなく、從つて腦は主として日本よりの輸入に仰ぐのである、用途としては**チウインガム**、菓子齒磨、藥用品の香料等に用ひられる、（以上及左諸表は在米原商務書記官の報告に依る）就中禁酒法實施以來本品の如き刺戟性品を含有する菓子及飲料の需要激增せる爲めか其需要額は益著しき增加傾向を示して居る。

米國薄荷油輸出入額表（單位封度）

次年	輸入		輸出	
一九一八	三九、六八七	四六、七六八弗	五九、六〇六	二〇二、八五六弗
一九一九	二〇〇、四二〇	三〇二、一八六	九七、八八〇	六五四、二八二
一九二〇	六二、四二六	一一〇、七〇三	七一、八四七	四五七、三九五
一九二一	一〇、五五四	一三、九四四	一〇四、九〇八	二六四、七一四
一九二二	三、一六九	四、二七六	一二八、九〇六	二九八、七四三
一九二三	一、三九五	—	一二三、二一二	三六六、二七三
一九二四	三七六	三、一三〇	一七六、八二〇	八四六、五二八
一九二五	二五、一二三	—	六八、〇三八	—

一九二六年の輸出は減產の爲め多大の減少あるも價格に於ては前年度と大差なき見込。

米國商務省貿易表は薄荷油輸入國別表を掲記せぬが大體に於て日本を主とし英獨之に次ぐものと思はれる。輸出は英獨加等を主とす一九二四年の明細は左の如くである。

米國薄荷油輸出國別表（一九二四年）

仕向國	數量（封度）	價額（弗）
英國	八〇、四九〇	三九三、七三六
獨逸	三六、一二二	一八四、四八二
加奈陀	二一、七四八	八九、八五七
佛國	一四、二一六	六七、三九〇
濠州	八、一〇〇	二八、九〇九
蘭領和	三、四〇四	二五、八八四

香港		四、〇五〇	一八
其他			一六、六六七
計		一六七、八二〇	八四六、五二八

米國薄荷腦輸入額表

年次	數量(封度)	價額(弗)
一九一八	一五〇、八七六	四一二、四四八
一九一九	二九六、一七九	一、五八三、四三〇
一九二〇	二〇五、九一一	一、五六四、九八二
一九二一	一六四、九八六	九一六、〇七八
一九二二	一八二、二八七	八八一、二三八
一九二三	一九七、四七六	一、四六七、一三〇
一九二四	一九三、二六一	一、七四三、九三七

一九二四年米國輸入腦主要國別

國別	數量(封度)	價額(弗)
日本	一四八、二七五	一、三五一、一六七
英國	二二、二四七	一七一、二二六
獨逸	一一、六九三	一二三、〇九二
佛國	八、三一五	七〇、二九二
加奈陀	一、二〇〇	一三、一四〇
支那	七二〇	六、三九二
其他		
計	一九三、二六一	一、七四三、九三七

(2) 歐州

在倫敦松山商務書記官の報告に據れば、英國に於てはミント草より製造せらるゝ薄荷あるも、其生産量至つて少く又比較的に高價であるから、其用途も高價なる藥品、飲料、香料用に限定せられて居る。英本國薄荷の消費量は腦約一萬四五千斤、油六七萬斤と見られて居るが、其大部は日本より輸入せられる英國の輸出入統計にはメンゾールなる項目あるも薄荷油に付ては等しくエッセンシアルオイル中に包含せられ居り單獨の統計はない。

英國メンゾール輸出入高表　右數量(封度)　左價額(磅)

	輸入			
	一九二三年		一九二四年	
獨逸	二、七一二	三七	一、四二四	一、四九〇
	二、五九七	二三	三、四四五	一、一八〇
佛蘭西	五四九	三、一二五		
	四二三	三、四九六		
日本	五三、六五八	三九、一六一	四一、七七〇	四、一八四
	六一、七五二	六三、八四四	一〇二、五四五	一一、四九五
	(右ハ臺灣及支那ニ於ケル租借地ヲ含ム)			
米國	七六八	一二〇		
	八八五	一一九		
計			一九	

	輸出			再輸出		
	一九二二年	一九二三年	一九二四年	一九二二年	一九二三年	一九二四年
其他ノ外國	一、八六三	三〇四	二〇			
英領地計	一、二九二	八八三				
合計	一三〇	—	—			
	五九、六八〇	四二、七四七	四七、八六八			
	六七、二三七	六八、三六五	一一八、六六五			
獨逸	五、五四四	四、八〇二	四、八六二	六、八四一	七、五一九	一二、四二二
佛蘭	三、五八〇	三、六六〇	一、八五〇	三、十七九	六、四〇一	四、八八一
日本	—	—	—	—	—	—
米國	二九、八四八	一三、六一六	八、八九六	三三、五三九	二五、八四一	一九、五五六
瑞典	三、二五六	一、六七八	一、七四一	三、九八五	四、〇七四	四、九六一
伊太利	五三四	—	三〇〇	七二六	—	九三八
其他ノ外國	五、五一一	三、五〇五	二、六六七	七、一八二	七、二〇三	七、四五七
英領地計	一、二〇一	一、一八〇	一、五六四	一、四五八	一、七七四	四、四六六
合計	四九、四七四	二八、四四一	二一、八八〇	五七、五一〇	五二、八一二	五四、六八一

	輸出		
	一九二二年	一九二三年	一九二四年
諸外國計	二、五九五	五、五九二	一七、一一二
	二、七一二	八、七〇九	二七、四八〇
英領地計	五五九	二、四六九	三、〇五九
	八二九	三、八六一	五、三二三
合計	三、一五四	八、〇六一	二〇、一七一
	三、五四一	一二、五七〇	三二、八〇三

獨逸では南方**チユーリンケン**地方に極めて少量の良質原料を生産するも一部嗜好者の需要をすら充するに足らず、主として外國粗製品の加工製精による製品を以て其需要充て尚一部を再輸出するけれども、其輸出入量數は他の物と一所に統計せられて居り、單獨の數字を知ることは出來ない、腦油の國内消費概算額は左の見當である。（以上在漢堡川島總領事の報告に據る）

一九二四年	一七〇、〇〇〇瓩
一九二五年	一七〇、〇〇〇瓩
一九二六年	二〇〇、〇〇〇瓩

尚近來合成薄荷なるものが出來、目下主として佛國方面に於て生産せられて其産額も遂年增加の趨勢にあるが、今の處尚薄荷含有量及其香氣に於て遠く天然薄荷に及ばず、價格は天然薄荷好況の時代に於ては之より遙かに安價であつたが、其相場下落せる今日尚採算上引合ふや否やは疑問とすべく、尚日本薄荷の强敵とするには足らぬが、將來其品質及生産經費に關する研究發達せば或は、日本天然産薄荷の强

敵となる時代が來るかも知れぬ。

歐州市場に於ける本品の取引は、毎年十一月より翌年一、二月頃に於て最も盛に行はれ、相場も大體此期間に於て最も引締るが、三月以後漸次に上向き六、七月の交に至つて、一年間の最抵相場を見るのが例であるが、由來歐州各市場に於ける本品は其量に於て日本品が大部分を占め居り、其供給數量に對する見込を立つるに簡便なること、商品として容積小なる爲め取扱に便なること、長期に渉るも品質の變化比較的少きこと等の爲め倫敦商人中には漢堡方面の商買と聯絡をとり弱氣强氣の**グループ**を造り、所謂「紙」取引に依りて、薄荷相場を作り出し屢々實際の需給關係から離れた相場を現出して不安定な取引を行ふ事があると云ふ。

本品の取引が屢々上記の投機的思惑材料に使用せらるることは援いて日本にも影響があり、我國斯業の堅實發達の爲めには面白いことではないので、かゝる商取引方法の改善に關する努力は喫緊の事項であろう。歐州市場に於ける薄荷製品中上等品としては獨逸及英國製品で米、伊、洪諸國品之に亞くとなし本邦品は遙かに劣つたものとせられて居るが、量に於て最も豊富なのは矢張日本品であつて本邦品としては所謂 Skint 卽ち Suzuki, Kobayashi, Yamada, Nagaoka, Tase 各商店の輸出品の外近年J. M. なる商標のもの（在大阪日本除蟲粉株式會社製品）又次第に需要を喚起しつつある。

尙參考の爲左に在倫敦商務書記官の報告による英國薄荷製品相場表を掲ける。

倫敦最近三年間各月相場表　（單位封度）

年月	薄荷油 最高	薄荷油 最低	薄荷腦 最高	薄荷腦 最低
一九二四年 三月	一八、〇 志片	一四、〇 志片	六〇、〇 志片	五八、〇 志片
四月	一八、九	一七、〇	七〇、〇	六〇、〇
五月	一八、六	一六、〇	六六、六	五七、〇
六月	一六、〇	一四、六	五七、六	四八、〇
七月	一四、六	一三、九	五〇、〇	四五、〇
八月	一七、〇	一三、九	五七、六	四七、六
九月	一八、〇	一七、六	五七、六	五二、六
十月	一九、〇	一七、〇	六五、〇	五二、六
十一月	二四、〇	一九、〇	六五、〇	五五、〇
十二月	三三、六	二三、六	五八、〇	五四、〇
一九二五年 五月	一四、六	一四、六	四四、〇	四三、六
六月	一五、六	一四、三	四三、三	四三、六
七月	一七、六	一五、六	四七、六	四三、〇
八月	一九、六	一六、九	四七、〇	四五、六
九月	二七、六	二二、六	四七、〇	四五、六
十月	三〇、〇	二七、六	四七、〇	四四、六
十一月	二九、〇	二六、〇	四四、六	三五、〇
十二月	二六、〇	一八、〇	三五、〇	二五、〇
一九二六年 一月	一八、〇	一三、〇	二七、六	二三、〇
二月	一三、〇	一二、六	二三、〇	二二、六

三月	一一三〇
四月	一一九九〇
五月	一一九〇〇六
六月	一一〇一九
七月	一一一〇六
八月	一一一九三九
九月	一一一八九三
十月	一一一八八三
十一月	一一一七七三
十二月	一一一七七〇六

14-5
189

終